



宮代紀行 山崎地区を行く

開催期間 平成24年5月12日(土)～7月8日(日)

宮代町郷土資料館

〒345-0817 埼玉県南埼玉郡宮代町西原 289 番地

TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601

開館時間 9時30分～16時30分

期間中の休館日 月曜日

はじめに

宮代町は大宮台地の東北部に位置し、旧石器時代から現在に至るまでおよそ 20,000 年の歴史があります。そうした歴史や文化の足跡は町内の各地域に様々な形で、それぞれ特色を持って見られます。

資料館では、このような町内各地域の特色ある細かな歴史や文化について「宮代紀行」と題し紹介していますが、その第 2 回目として山崎地区（宿、山崎）を取り上げました。

山崎地区は、山崎遺跡の発掘調査などから旧石器時代から人々が住んでいたことが明らかになっています。縄文時代の約 7,000 年前や 3,500 年前の、住居跡や当時の人々が使った土器や石器が数多く発掘されています。また、古墳時代の遺跡としては、山崎山遺跡で関東地方でも数少ない鍛冶工房跡も発掘されています。今回の展示ではこうした発掘された資料、江戸時代や明治時代等の古文書、山崎地区に残る行事、社寺等について展示しました。

本展示が、長い間地域で受け継がれてきたさまざまな歴史や文化に触れる機会となり、そして地域の新たな発見と理解、そして愛着につながれば幸いです。

平成 24 年 5 月

宮代町郷土資料館

凡例

1. 本書は平成 24 年 5 月 12 日から 7 月 8 日まで開催される、宮代町郷土資料館 平成 24 年度第 1 回企画展「宮代紀行 山崎地区に行く」の展示図録です。
2. 展示の企画、図録の執筆、写真撮影、編集は当館学芸員青木秀雄が担当しました。なお、写真の一部は町史編さん等で撮影したものを使用しています。
3. 資料の中には紙面の関係で掲載できなかったものもあります。また、期間中、展示替を行う場合があります。
4. 企画展の開催にあたっては、下記の方々を始め多くの皆様にご指導、ご協力をいただきました。（順不同・敬称略）

山崎地区、宿地区、姫宮神社、重殿社、浅間神社、新井浩文、市川和子、市川敏夫、折原静佑、金子光佑、金子松太郎、島村松四郎、島村和孝、園部いち、渡辺栄、国土地理院

山崎地区について

山崎は、かつては星谷、中山、前田、山ノ下、京塚、笠原、蓮田、第六天、南第六天などとともに百間村の小字でしたが、昭和 5 年 2 月の大字廃止に伴い字名の一つとして用いられるようになりました。

山崎地区の歴史は古く、近年の発掘調査の成果から旧石器時代約 20,000 年前から人々が住んでいたことが明らかになっています。縄文時代にも多くの遺跡があり、山崎遺跡では縄文時代草創期約 12,000 年前の尖頭器なども発見されています。また、縄文時代早期 7,000 年前や後期 3,500 年前の住居跡や土器や石器などの遺物も数多く発掘されています。

古墳時代には、宿源太山遺跡から 3～4 世紀頃の住居跡や土器が、山崎山遺跡では埼玉県最古の 4 世紀後半の鍛冶工房跡が発掘されています。

中世(鎌倉、室町時代)には、宿源太山遺跡で板石塔婆^{いたいしとうば}や宋銭^{そうせん}が発見され、山崎遺跡や山崎南遺跡でも甕^{かめ}や土鍋等が出土しています。

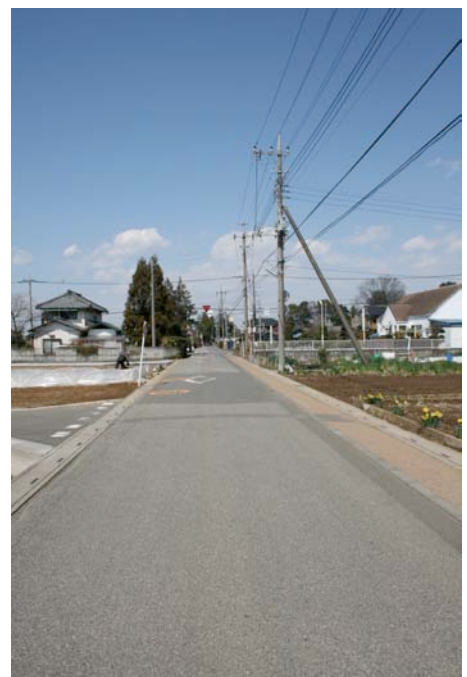
江戸時代には、山崎地区は大名領や旗本領が複雑に入り組んでいました。一方、笠原沼新田の開発が享保 13 年 (1728) に行われています。また、宿地内には「源太山」と呼ばれる松永源太左衛門の屋敷跡があります。

明治時代以降は、百間村、百間西原組等に属し、明治 22 年には百間村、そして昭和 30 年百間村が須賀村と合併して宮代町の一地域となっています。現在、山崎地内には行政区として、宿と山崎があります。

なお、山崎地内には重殿社^{じゅうどのしゃ}、神明神社^{しんめいじんじや}、浅間神社^{せんげんじんじや}、御嶽神社^{おんたけじんじや}や、松永坊^{しょうえいぼう}などの社寺があります。また、東村の神社であった第六天神社も山崎地区の西にありました。



山崎山の風景



宿の通り

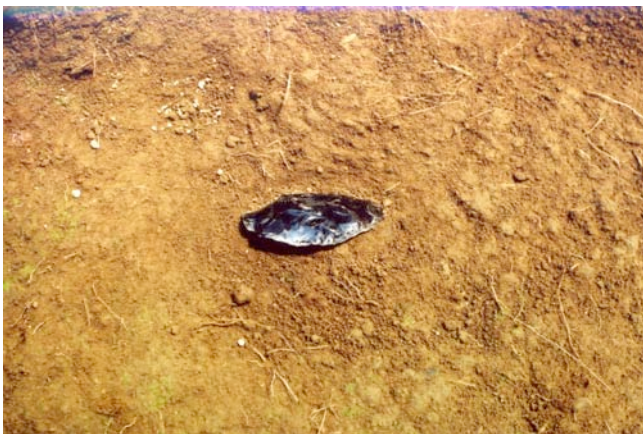
発掘された山崎のむかし

山崎地区の台地上には、山崎遺跡、山崎南遺跡、山崎山遺跡、星谷遺跡、宿源太山遺跡があります。昭和 50 年度の山崎遺跡の発掘調査を初めとして、星谷遺跡、山崎山遺跡、山崎遺跡等が相次いで発掘調査され、その結果、旧石器時代から古墳時代、中世、近世の遺構、遺物が多数発掘されました。

旧石器時代の遺跡では昭和 50 年度に行われた山崎遺跡の学術調査によって、関東地方でも類例のない両面加工石器が発掘され、山崎山遺跡でもナイフ型石器が発掘されています。

縄文時代の遺跡では、山崎遺跡で早期 7,000 年前、山崎遺跡、山崎山遺跡、山崎南遺跡、星谷遺跡で後期 4,000～3,500 年前の住居跡が発掘されています。ことに、山崎遺跡では縄文時代後期の火災で焼けた住居跡などが発掘されました。こうした縄文時代後期の遺跡が多く見られるのが、この地域の特徴です。なお、このほかにも縄文時代早期（約 8000 年前）、中期（4500 年前）の土器も発掘されています。

古墳時代の遺跡では、宿源太山遺跡から 3～4 世紀頃の住居跡とそれに伴う土器が出土しています。また、平成 2 年度に行われた山崎山遺跡では 4 世紀後半の鍛冶工房跡や井戸、鉄製品の出土した住居跡も発掘されました。一方、山崎遺跡では 5 世紀終末から 6 世紀前半の壁際にカマドを持った住居跡が数軒発掘されています。住居内にカマドを持ち始める初期の頃のものです。



山崎遺跡両面加工石器出土状況(旧石器時代)



山崎南遺跡 A 地点全景(縄文時代後期)



山崎南遺跡 B 地点第 1 号住居跡(縄文時代後期)



山崎遺跡第 3 号住居跡土器出土状況(縄文時代後期)

鍛冶工房のあるムラ

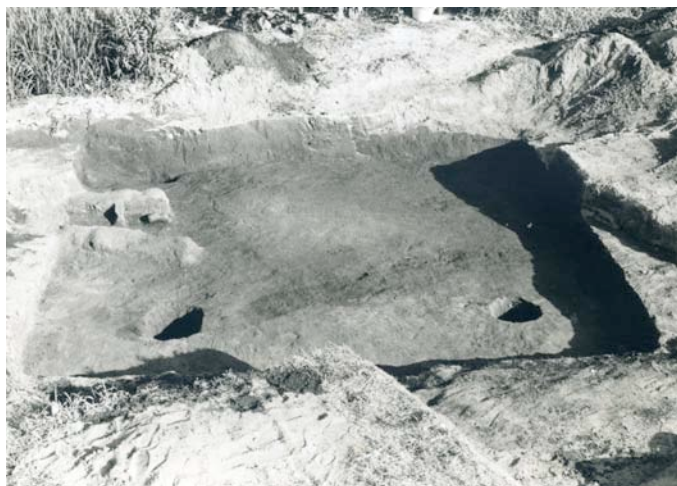
平成2年9月、山崎山遺跡で古墳時代4世紀後半の鍛冶工房が発掘されました。鍛冶工房とは、鉄素材を鍛冶炉で熱し不純物を取り除き、鉄製品を作る場所です。製作に用いたふいごの口(羽口)やハンマーストーン、製品を磨く砥石や出来上がった錐と考えられる棒状の鉄製品、鍛冶滓、鍛造剥片など製作工程で発生した物も多数出土しています。こうしたことから、山崎山遺跡で本格的な鍛冶が行われていたことが明らかになりました。また、付近の住居跡からは地域の中心的な大規模な集落からしか出土しないという大型の壺も出土しており、この遺跡が4世紀後半当時の最先端技術を持つ、この付近一帯の中心的な集落であったことがうかがえます。こうした鍛冶工房跡は関東地方でも現在4例を数えるのみです。



山崎山遺跡鍛冶工房跡(古墳時代前期)

カマドのある家

山崎遺跡では古墳時代の本格的なカマドを持った住居跡が発掘されています。鍛冶工房から200年ほど経った6世紀前半頃のもので、それ以前は地面を掘り窪めただけの炉でしたが、住居内の壁際に、粘土を用いてしっかりしたカマドが作られるようになります。こうしたカマドは、一昔前まで家の土間の台所にあったカマドの原型です。カマドの出現により住居内の空間の使い方にも大きな変化を与えました。また、土器も底のないこしき甑と呼ばれる蒸し器が出現するなど、大きな変化がありました。



山崎遺跡1号住居跡(古墳時代)

鎌倉・室町時代の発掘された遺物

宿源太山遺跡では、鎌倉、室町時代と考えられる板石塔婆が出土しています。板石塔婆とは供養塔の一種で、梵字や年号等が刻まれ、頭部は三角形をした細長いものです。宿源太山遺跡では、上部が欠けているものの残された文字からおそらく元徳4年(1332)と思われる板石塔婆や11号土坑からキリーク(阿弥陀如来の梵字)が見られる頭部破片が出土しています。また、宋銭(きねいげんぼう熙寧元寶)も一点出土しています。

このほか、山崎地内では山崎遺跡で常滑の甕、山崎南遺跡で在地の内耳土鍋やすり鉢が出土しています。



宿源太山遺跡板石塔婆出土状況
(室町時代)

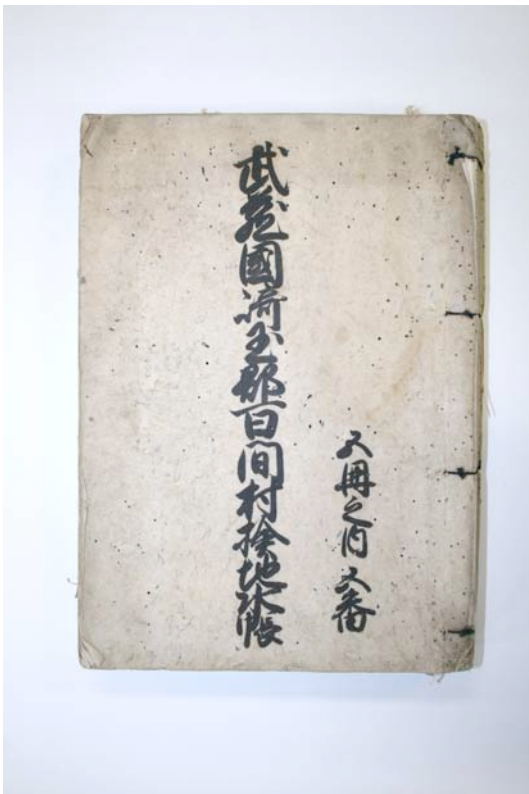
江戸時代の山崎

江戸時代、旗本領や大名領、天領（幕府の直轄地）が複雑に入り組んでいました。

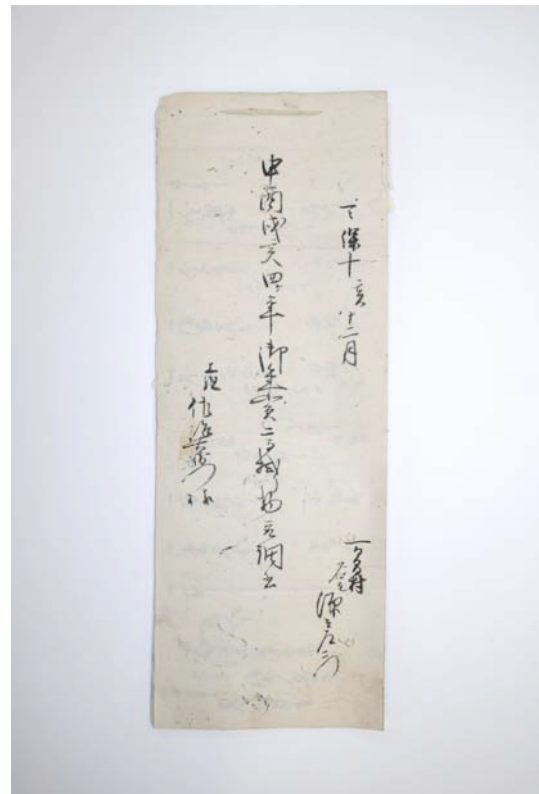
山崎地区の属していた百間村は、江戸時代初期は旗本服部氏の領地となり、その屋敷跡と思われる遺構が西原地内で発掘されています。その後、旗本朽木氏、旗本永井氏、旗本池田氏の所領となり、旗本朽木氏領は久喜藩領、岩槻藩領に、さらに岩槻藩領は旗本森川氏、旗本松波氏領となり、久喜藩領が佐倉藩領となって幕末を迎えています。こうした中、山崎地区は幕末には基本的に山崎は百間西原組の上組に属し旗本森川氏の領地で、宿が百間本村として佐倉藩領となっていました。これは、山崎地区だけでなく百間村全体に言えることです。こうした複雑な形は、元禄 8 年 (1695) 百間村が分村した時に家の持ち高によって分けたため、その家が持っている土地がそれぞれの村に属したため起こったことです。このため、隣の家や田畑がそれぞれ別の村に属していたということも多く見受けられました。これがさらに、明治 22 年以降百間村の大字として残り、昭和 5 年大字を廃し字に統一してようやく解消されました。

一方、山崎地区の一部となっている笠原沼は、江戸時代寛永年間に大河内金兵衛によって誕生しました。その後、享保 13 年 (1728) には井沢弥惣兵衛によって開発され、笠原沼新田がつくられました。こうして出来た笠原沼新田は天領となりました。

山崎地区には元禄 10 年 (1697) の検地帳や、年貢に関する文書、村の絵図、また、明和 4 年 (1767) の石橋供養塔や宝暦 2 年 (1752) の庚申塔などが残されています。



百間村検地帳(元禄 10 年)



申酉戌亥四ヶ年御年貢高掛り物取り調書
(天保 10 年)

絵図から見る山崎

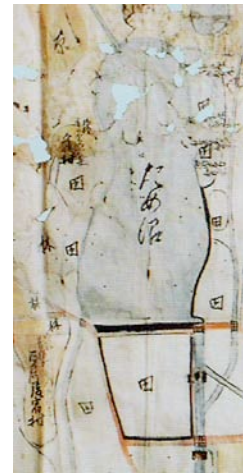
最も古い山崎付近の絵図は、江戸時代万治元年（1658）頃のもので「後宿村」とあり「宿」の地名が出てくる最初の資料です。谷を挟んだ西原地区には旗本服部氏の陣屋跡と推定される遺構が発掘されており、その北側を「後宿」と呼んだものと思われます。その後、江戸時代中期の百間村絵図には「源太宿」と記されています。これは、宿に住んでいた百間村の名主松永源太左衛門の名前からそう呼ばれたものと考えられます。なお、万治元年頃の後宿村は御領（幕府の直轄地）で曾根五郎左衛門の代官所支配にあったことが分かります。笠原沼も「ため沼」と記されています。

江戸時代中頃の絵図には、山中、十殿（重殿）、中山、前田耕地の地名が見られ、御領分や森川下総守、池田備中守等の支配地であったことが分かります。江戸時代後半の絵図では、山ノ下、京塚、前田耕地等の地名や笠原沼落、笠原沼御新田等、さらに「御領分、森川様、池田様、松波様、四給入相」など支配の関係も記されています。浅間神社の前から直線的に伸びる道が「内郷耕地囲堤」と記されています。一方、もう一つの地図では同所が「御伝馬道」と記され、堤が杉戸宿への助郷（宿場に継ぎ立ての人足や馬を供給すること）にかかわる道であったことが分かります。また、「京塚作場道」などいわゆる耕作道・のら道である作場道の記載が見られます。このほか、浮戸谷落（逆井落堀）や河原井沼落堀（姫宮落堀）などが記されています。

石橋供養塔

この石橋供養塔は、用水の水洗い場の台石であったのを発見したものです。高さ 60 cm、幅 24 cm、奥行き 20.5 cm を測り、正面には「奉建立石橋供養塔 明和 4 丁亥年 11 月吉日 武州埼玉郡百間領 願主□□」と刻まれています。勸化村（石橋建築に寄付をした村）36 か村の村名が記されています。

この石橋供養塔は、浅間神社の先にある横手堤の笠原沼落堀に架かる橋が「石橋」と呼ばれていたことから、その建築に関するものと思われます。石橋の建築にあたっては、現在の宮代町を中心として、杉戸町、蓮田市、白岡町、春日部市、さいたま市岩槻区といった広範囲にわたる村々からの寄付があったことが分かります。



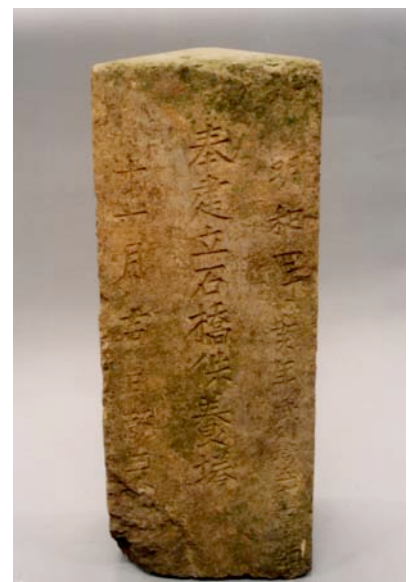
ため沼絵図（江戸時代 万治年間 1658 年頃）



百間村絵図(略図)（江戸時代中頃）



百間村絵図(略図)（江戸時代後期）



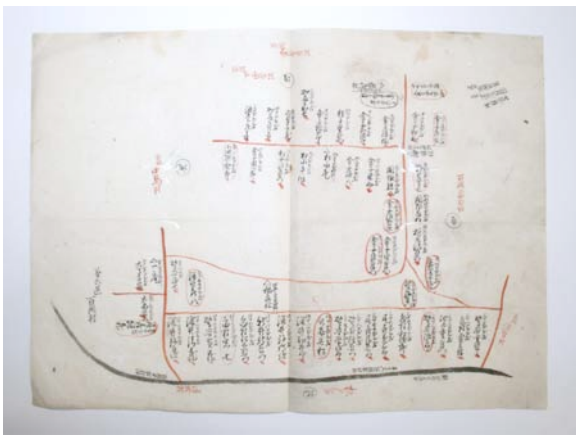
石橋供養塔

明治から昭和へ-字山崎の誕生-

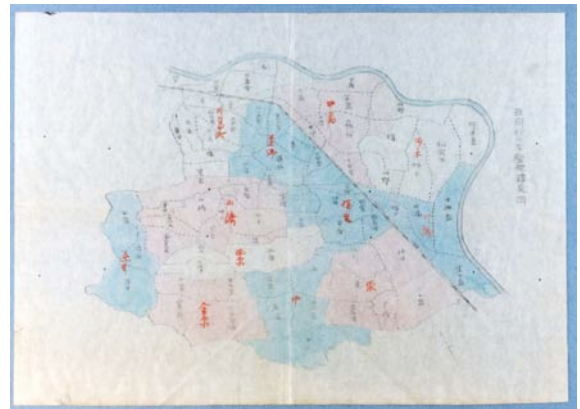
廃藩置県によって旗本領は武蔵知県事支配に、大名領である佐倉藩領は佐倉県となり、明治2年(1869)正月武蔵知県事の支配地は大宮県、9月に浦和県となり、さらに明治4年佐倉県も含めて埼玉県となりました。

明治4年戸籍法の制定に伴って、全国を大区、小区に分け、それまでの名主、組頭を廃し、小区ごとに戸長、副戸長を置くようになりました。百間各村は第6区に属し、百間東村に戸長1名、副戸長4名、蓮谷村・百間中島村に戸長1名、副戸長4名、百間中村・百間金谷原組に戸長1名、副戸長3名、百間村・百間西原組からは戸長1名、副戸長5名が置かれました。山崎地区からは百間本村・百間西原組の戸長、副戸長各1名が任命されています。その後、明治17年百間中村連合戸長役場が置かれました。さらに明治22年町村合併により百間村が誕生しました。それまでの村々は大字名として引き継がれました。

江戸時代の村を踏襲した大字は非常に複雑に入り組んでいました。昭和4年百間村長から埼玉県知事に提出した「大字廃止及字区域変更並改称ノ義ニ付許可稟請」の文書中に「各大字トモ村内全面ニ点在錯綜シテ一定ノ区割ヲ有スルモノナク耕作地は勿論住宅地ノ一部ニスラ大字ヲ異ニスル地域ヲ存シ行政其他諸般ニ及ホス不便ハ洵ニ鮮少ナラス」とあり、その複雑から生活に不便をきたしたため改正を申請したことが分かります。こうして、昭和5年2月大字を廃して字に統一し、その一つとして「字山崎」が誕生しました。誕生時は戸数70戸、人口436人を数えました。



第六区百間本村住宅地図(明治時代)



百間村大字整理予定図(昭和5年頃)



字切図(山崎付近) (明治時代)

行事と社寺

山崎地区の主な行事としてお獅子様と浅間神社の初山とがあります。

7月7日、宿、山崎ではそれぞれムラの行事として悪疫退散を願って行われるお獅子様の行事があります。かつては獅子頭と天狗の面を若い衆が持ってムラ中を巡りました。こうしたお獅子様の行事は、町内では百間地区を中心に行われています。

一方、浅間神社では毎年7月1日に初山の行事が行われています。このこれは生まれて初めて初山の日を迎える子どもたちがお参りし、健やかな成長を願うものです。この浅間神社は、江戸時代後期盛んになった富士信仰の講社の人たちによって建立されました。

また、山崎地区には山崎の鎮守である^{どゆうどのしゃ}重殿社、宿の鎮守である^{しんめいじんじゃ}神明神社を始め、^{おんたけじんじゃ}御嶽神社、^{しょうえいあん}松永庵があり、地域の人たちを中心としてそれぞれ祭礼等が行われ、信仰されています。

山崎のお獅子さま

山崎では、毎年7月7日に行われています。姫宮神社から獅子頭と天狗の面を借り、かつては小太鼓の先触れの後、これを若い衆が持ってムラ中を巡りました。現在は集会所に獅子頭をおいてお参りやお祓いをします。ムラ中を廻っているときは、大きな数珠を一緒に担いで行いました。各家を巡った後、最後に笠原落に架かる石橋から天狗が使っていたお払いの弊を流しました。



お獅子様の行事風景（平成6年頃）

宿のお獅子さま

宿では、毎年7月7日に行われています。かつては、若い衆が獅子頭と天狗の面を持ってムラ中を巡りました。現在は集会所に獅子頭をおいてお参りやお祓いをします。ムラ中を廻っているときは、各家を巡った後、最後に笠原落に架かる石橋の上から獅子頭の口が水面に付くまで下ろし厄を流していました。



お獅子様の行事風景（平成6年頃）

じゅうどのしゃ 重 殿社

重殿社は山崎の鎮守で、祭神は金山彦命かなやまひこのみことを祀っています。権現様とも言われ、7月24日に祭礼が行われています。

境内には、文政12年（1829）に造られた高さ約2mの二十三夜塔や明和2年（1765）の稲荷社が祀られています。堂内には伊勢講などの額が納められています。また、拝殿の前には草鞋がたくさん掛けられており、足の病の神様としても信仰されています。なお、重殿社の幟旗は杉戸の教育者で書家でもあった市川節堂の筆によるものです。



しんめいじんじゃ 神明神社

宿の鎮守です。祭神は大日靈貴命おおひるめむちのみこと（天照大神）で、五穀豊穰、無病息災の神として信仰されてきました。7月26日に祭礼が行われています。

古くは、元禄10年（1697）の百間村検地帳に「神明社地拾五歩 別当松永坊」とあり、江戸時代中頃には存在したことが分かります。江戸時代後期に編さんされた新編武蔵国風土記稿にも「神明社 松永坊持」とあります。現在の本殿は流造りの建物で、大正11年に修繕した記録が残されています。境内には伊勢参拝記念の石碑があります。



せんげんじんじゃ 浅間神社

山崎の浅間神社は、かつて赤松の木があったことから赤松浅間神社とか、字京塚にあったことから京塚浅間神社などと呼ばれています。

木花咲耶姫このはなさくやひめを祭神としています。祭日は、7月1日で、初山の子どもたちがお参りしています。江戸時代後期以降盛んになった富士信仰の講社の人たちによって建立されました。江戸時代に島村四郎左衛門という、27回もの富士登山の経験があったといわれている人（先達）がいたと伝えられており、その人が付近に富士信仰を広めたものと思われます。子孫の家には文久2年（1862）や明治35年（1902）の銘のある、富士講の旗やそれを入れる箱等が残されています。なお、境内の最も古い文化9年（1812）の石塔には島村重行幸□□の名が、また、文久元年（1861）の石塔には島村幸蔵重行の名がみられます。島村氏の関係する浅間神社にはこの重行の「重」の字が石塔に刻まれているのが特徴です。当所付近の富士講の中心的存在であったようです。



旗（文久2年）

おんたけじんじゃ

御嶽神社

山崎の道路際に小さな塚が築かれ、その頂上に御嶽神社が祀られています。木曾の御嶽神社を信仰する講の人たちによって建立されたものです。頂上にある石碑の表には「御嶽神社 八海山神社 三笠山神社」とあり、裏面に大正6年10月 先達市川内膳建之」とあり、側面に世話人や御嶽講中の人々の名前が刻まれているところから、大正6年に御嶽講の先達や講の人たちによって建立されたことが分かります。このほか、江戸時代中頃御嶽信仰を広めた秩父出身の普寛行者を祀った石碑や、三笠山神社を祀った石碑などがあります。山岳信仰の様子を伝える神社です。



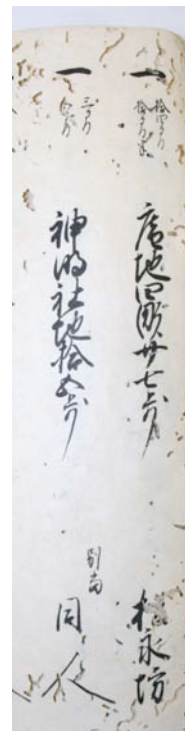
しょうえいあん

松永庵

松永庵は神明神社と同様に元禄10年(1697)の百間村検地帳に「庵地4畝廿七歩 松永坊」とあり、新編武蔵風土記稿には「松永坊 黄檗宗。葛飾郡牛島村、弘福寺末星谷山と号す。元禄年中松永源太左衛門と云う村民起立せしにより、坊号とせり。本尊弥陀を安ず。」とあります。また、明治時代初期に編さんされた武蔵国郡村誌には、「松永庵 村の南方にあり、本郡百間東村、真言宗青林寺持ちなり。相伝う、元和年中(1615~1624年)、松永弾正落来りて本村に居住を定め、其後、寛永中(1624~1644年)に至り、同氏の墓守として庵を修築なし、今村民松永源太左衛門の先祖なりと云う」とあり、その起源をうかがうことが出来ます。なお、この松永庵は現在宿地内にありますが、もともとは山号が示すとおり、いきがい活動センター(ぱれっとみやしろ)の西隣の星谷地内にあり、明治時代の初めに現在の地へ移ったと思われます。



昭和48年頃の重殿社



元禄10年(1697)の検地帳に記載のある松永坊と神明社

写真で見る山崎の風景



浅間神社前にて(昭和 18 年頃)



笠原沼たんぼ(昭和 48 年頃)



源太山の風景(昭和 48 年頃)



山崎山（重殿社前から北西付に）
(昭和 46 年頃)



航空写真（昭和 41 年）